

私と精神修養

——文化勲章受章記念講演——

小倉遊亀

昭和 56 年 5 月 15 日

財団法人報恩会・鎌倉分会合同修養会

会場：逗子市役所公会堂

今日は皆様の温かいお心遣いによって、私に美しいお花を贈っていただきました。ここにありお花は、ただそこにある薔薇のお花だとあなた方はお思いくださるかもしれませんが、この薔薇の花こそは法蓮先生であり、法得先生であり、皆様であり、私であります。

これをわざわざ私に頂戴いたしましたということは、本当に私にとりましては何とも有り難いことだと存じております。帰りましたら、早速、水切りをいたしまして、玄関に活けさせていただきます。そしてこの薔薇の花びらが咲ききって散って落ちるまで挿しておきます。

散って落ちれば、その花はそれでお仕舞いになりますけれども、この薔薇の花には枝があり、根があったに違いありません。根があったからこそ枝が出たんです。その根もずっとこの花と同じ気持ちだと思います。

法蓮先生は、お仕えしていた蜂須賀侯爵亡き後、侯爵家からお暇をいただきまして、熱海の長畑山に引つ込んでお仕舞いになりました。それまではいと高きところにおいでになりましたのですけれども、一般の人たちが伝え聞き、伝え聞きしてですね、一人、二人と先生のその小さな方丈をお訪ねするようになったんだそうでございます。

今日は自分のことを少し申し上げなければいけません。それにつきまして、これは私自身に言い聞かす言葉でございますけれども、先生は「体験を語れ」とおっしゃったんです。

理屈を言うならば本を読んで、それを切り抜いて暗唱すればいいんだけど、それでは何にもならないから、みんなお互いに自分の体験を語り、人様の体験を聴かせていただきながら、自分自身を反省していく。そしてどこまでも自分自身というものを追究していかなくてはならない。追究していつて『いったい自分というものの正体は何だろうか』、そういうことを日常生活の中で自分自身で探究していかなくてはならない。

『もういいわ、そのことは済んじゃったんだから、忘れてしまおう』と言って、ほったらかしておいたんじゃない駄目で、『自分に何かいけないことはなかったかしらん。先方さんの気持ちを傷つけたことはなかったかしらん、どうだろうか……』と振り返ってみるんです。

報恩会精神の第一は、峻厳なる反省からこの宇宙の不可思議を知り、そして自分自身を知ることです。本当に自分の姿の一部分でもハッと気づかせていただければ、一を知ることができるとは、

私たちの教えは「一を知ることから始まって、一を知るところで終わる」と言われています。その最後の一というものは、これはなかなかどうしてどうして、私たちが束になって一所懸命に頑張ってもつかむことが困難です。

私ね、話が飛ぶようでございますけれども、自分が奈良の学校を出てから、いろいろ苦労しておりましたときに、自分の一番の楽しみであり、生きがいであり、命のように思っている絵について、法蓮先生から「絵を捨てろ！」と言われたことがあるんです。

そして、その「捨てろ」という意味はその翌日の朝わかったんです。何も「絵を焼いてしまえ」とか「筆を折ってしまえ」とか、そういう意味じゃなかったのです。

「おおいに絵を描け」ということなんです。「おおいに絵を描きながらその絵にとらわれなきやいいんだ」ということ。

『この絵を描いて文化勲章をもらおう』とかね（笑）。

いや、みんな思いますよ、最初は。駆け出しの頃はそう思いますよ。まず第一に入選しようと思いますよ。入選していくうちに賞をもらおうと思いますよ。賞も奨励賞より大観賞がほしいと思いますよ。

だんだんとその念が強くなるとね、絵にとらわれてしまってね、いつのまにか自分の本心の自由自在な愉快な心がどこかへ行ってしまうって、絵が硬くなってしまうんです。そして絵にすごく癖がついてしまうんです。

それを法蓮先生から言われましてね、それで自分でも気をつけておりましたんですけれども、どうしていいのかわからないんです。

私はね、そういう技術方面のことでは、初めて絵を描き始めたような気持ちでおりまして、わからないんですよ。何とか尊敬する絵の先生を探してですね、その先生にぶつかってみようと思ったんです。

もし「失礼なやつだ、帰れ」と言われたら帰りますし、「まあ、どんな話か聞いてやろう」と言われたら、これはもう百年目で、私は生きることができんだからと、命を賭ける思いで大磯の安田鞞彦（ゆきひこ）先生のところへ行っただけです。

行きましたけれど、私は大磯の安田先生なんてお話をしたこともなければ、お顔を見たこともありません。ただそのお作品だけは知っているんです。お作品にはもうまいてしまっているんです。『いまこの先生以上に描ける先生はいない』と知っているんですから、絵はもう一

から十まで知っているんです。だけれども、どんな先生なのか分からないんですね。

ちょうど六月二十八日ですから、もうじきです。梅の実が青くなっておりましたつけ。

その当時の私はね、可哀そうですね。たった四十五円の月給をもらっていたんです。それで二十五円のお家賃のお家に入って、母と二人で暮らしているんですから、その暮らしがどんな暮らしだかお分かりでしょう。

そしてその中からね、晒(さら)し木綿の新しいお腰を一枚作り、下駄を一足買い、上から下までとにかく安物でも何でもいいから、新しいものを揃えておいたんです。こうもり傘に至るまで……。

それを身につけてね、そして大磯へ来ますと、梅の実が垣根の上からたわわに下がっているお屋敷でした。

大磯駅の前で車屋さんがね、「あんた、行ったって駄目だよ。安田さんは誰にも会わないよ。すぐ追いつ返されるからね。覚悟して行きな」って、こう言うんです。

「遠いの？」と聞いたたら「遠くない。二、三町だ」と言うんで行きました。

「ごめんください」と言っておつたんです。そうすると「おう」という男の声がして、出てらっしゃったのが緋(かすり)の筒(つぼ)の着物を着た十六、七の書生さん。おつかない顔をした大きな人。その人が突つ立っているんですよ。

そしていきなり「何です？」と、こう言うんですよ。私が「はい、ちょっと先生にお尋ねしたいことがございまして……」と言ったら「あんた誰です？」と言うからね、用意してきた名刺を出したんです。その名刺にね「捜真女学校教員」と印刷してある。そこに私が自分で『図画の教員』と書き加えておきました(笑)。

「あのう、来月、県で図画の研究会がございます。そのときに私も出なくてはならないことになりました。私はちよつとみんなと違った考えをもっております。それを出そうかどうかどうしようかと考えております。

そのことについて安田先生に申し上げて、先生が『出せ』とおっしゃるのなら私は出させていただきたいと思っています。『よせ』とおっしゃたら出しません。ちよつと先生にお伺いするだけです。五、六分でもよろしいんですけれども、お目にかかせてくださいませんか。『よせ』とお伺いしますか」

そしたらね、黙って引つ込んでしまって障子を開けっ放しにしたまま、ちよつとも出てこない

ですよ。待てど暮らせど出てこないんです。

そのうちに違うほうのこちらの廊下のほうからね、ご婦人の方が出ていらして、その方の身なりを見て『奥さんじゃないな』と思いました。女中さんかしら、でも女中さんにしては少し品がいいし、とまあ、そんなことはどうでもいいと思ひまして、そうしたらその方が私の頭のてっぺんから足下までじろじろ眺めているのです。

そして私がいま言ったことをもういっぺん説明しました。そうしたらまた「少々お待ちください」と言つて、なかなか出てらっしゃらない。

ようやくその方が出ておいでになりましたね、「ご存じのように本人は病気で休んでおります。お客様には滅多にお目にかかりませんが、それが教育のことでございましたら大切なことですから、五分間だけならお目にかかります」とおっしゃった。

さあ、こっちのもんです。すべては私のものです。私は死ななくていい。どんなに苦勞しても絵描きになろうと思つていたんですから……。

その方に案内され、中に入つていきました。そうしますと、もう午後のことですから梅雨の日照りのお日様が、簾（すだれ）の陰からお座敷に斜めに射している。その射しているところに水色の座布団が置いてあつて、床の間を見ますと漢の童子の像が立っている。庭を見ますと梅の木には梅の実がなっていました。

しばらくすると音もなく入り口が開いて、風みたいにすうつと入ってくる方がいました。私はそれまで京都とか名古屋におりましたから関東へ来たのは初めてです。京都で一流の絵の大家と申しますと、みんな縫い取りのついた黒い羽織を着て、袴と白足袋をはいていらつしやる。これはどこへ行つても決まっています。そういう方が入つてらつしやるかと思つていたんです。

ところが、ふっと見ますとそんな方じゃないんですよ。呉服屋の番頭さんみたいな格好なんです。六月二十八日というともう暑いでしょ。暑いっていうのにセルのアンサンブルを着て、懐中時計をぶら下げているんです。その懐中時計、紐の色まで私は覚えていきますよ。濃い紫色の絹糸で編んだものです。それをぶら下げてふつと入つていらした。

パツとお顔を見ますと薄い頭の毛が上を向いて立っているんです。それから目を見ますと、お目だけが澄んでキュツとしています。

『あ、これは先生に違いない』と思ひましたから、座り直して謹んでおりますと、先生は私の

前で「やつ」と声をかけて、お座りになりました。

「いまお話は簡単に聞きました」とおっしゃいましたから「あれは嘘でございます」と言っただけです。

「いや、本当の話でございますけれども、そのことだけで来たんじゃないんです。私はもう死ぬか生きるかの境で、ぜひ先生のお弟子のなかに加えていただきたい、それを実はお願いに来たんです。おそらくだめだと思いましたが、嘘をついて先生をお起こしして誠に申し訳ございませんでした」と言いました。

いまから考えますと、その頃は九月から始まる院展の下絵をそろそろ先生に持っていく時期ですね。そのときの私はそんなこと知りませんよ。先生はおそらくそういう人が「今度こういう絵を描くからどうぞ入選させてやってください」と言ってきたんだと思ったんでしょう。最初の感じは良くなかったですね。

私は自分の身の上のことをお話しました。私は口が下手ですから早くは言えないんですよ。NHKのアナウンサーのように、あんな早口ではものを言えないんです。けれども一所懸命に、「奈良の学校を出まして、図画は横山常五郎先生に、日本史は水木要太郎先生に……」と、

こう言っただけです。

「え、水木君に習いましたか」とおっしゃるんです。

「水木先生には本当に大切にしてくださいました。わざわざ日曜日に私一人をお呼びくださいまして、安田先生の『御十六歳の聖徳太子』の絵を、ここで模写しろとおっしゃってくれました、私、それを大福帳に描かせていただきました」

と言ったら、先生はすっかり安心しておしまいになりましたね、それからおっしゃることみんな前と違って、心を許してお話くださいました。

「あなた、いま弟子にしてほしいと言っただけでも、絵の道には師匠も弟子もない。何でも言える先輩にならならせていただきます」と、そういう言葉をお遣いになったんです。

それで私、はあっと思いました。「ありがとうございます」と言いましたけれども、もう感激で涙があふれそうなんです。でも、こんなところで涙を流しちゃいけないと思って、一所懸命こらえて呑み込んでおりましたっけ。

そうしたら先生がこうおっしゃってくださいました。

「人間はね、五年にいつぱんずつ白紙の状態に返らなければいけない。赤ん坊に返らなければ

いけない。知恵がついて垢（あか）がたまるとそれを洗い直さなくてはいけない。絵描きもそうです。

いままで描いてきた絵に、たとえば評判の良かった絵が一枚あると、それにくつついちゃって、その癖がちつとも取れなくなる。今度の日曜に最近描いた作品を二、三枚持つておいでな
よ」

下げていらした時計を見ますと、五分の予定が二時間になってましたよ。それが本当に申し訳なくて「先生、お疲れになりましたでしょう。私、今日はおいとまさせていただきます。来週の日曜日の午後、お伺いいたします」と言って帰ってきました。

帰りはもうポロポロ涙が生まれてね、眼鏡のところにとまりますもんですから、道がよく見えなんでしょう。小石につまずきながら帰ってまいりました。

その次の日曜日におっしゃったことがあるんです。初めは私の絵をつくづく見ていらつしやいまして、一通りはほめてくださいました。そして、

「女の人には珍しく強いところがあるねえ。これは大変結構だけど、残念なことにはもうあなたの癖がついてしまっている。線にも色にも物の見方にも、あなたの癖がついている。これはいっぺんすっかり破って、白紙に返さなくてはだめですよ。そしてイロハから出直すんです」と言って、当時の名高い先生の成功された例を二つ聞かせてくださいました。

さらに、「あなた、いくつ？」と聞かれましたから「二十八歳でございます」と言ったら、「あと二年あるね。二年あって良かったね。人間は三十歳以上になると自分の皮が厚くなってなかなか破れないよ。ましてほめられてきた皮だとなお破れないよ」とおっしゃいました。難しい言葉ですね。そして一言おっしゃったんです。

「そしてその皮を破る苦しい苦しい体験を我慢してやり遂げて、一枚の葉っぱが手に入ったら、森羅万象すべて手に入るよ」

私は生意気で女学校時代から本ばかり読んでおりますからね、先生のそうおっしゃった意味がよく分かったんです。一枚の葉っぱが手に入ったらということは、一枚の葉っぱが自分の思うとおりに易々と描けるようになったらということです。

『はあ……。しかしこれは難しいことだな。私のような者にできるかしら』と思ったのですが、この先生と違って、死ぬ覚悟で新しい着物を着て来たんだから、その手前、もう死んでもかまわないから、やろうと思ったんです。

そしたら先生が「やろうと思ったたらおやりなさい。言いたいことがあったら何でも話してください。こちらも注意することがあったら何でも注意いたします。私が言わないうちは、ああじゃないか、こうじゃないかと考えないほうがよろしい」

とおっしゃってくださいました。それで私、安田先生のお弟子にさせていただいたんです。四月の二十九日は天皇陛下（昭和天皇）のお誕生日ですね。畏れ多いことでございますけれども、つい二、三日前、お祝いにお呼びいただきました。ごちそうをいただいて、お土産をいただいで、そしていつでもそうですが、陛下の前で一人三分ずつお話をすることになっていきます。私、今度で四度目なんです。陛下にお話し申し上げることが……。

一番初めのときに先ほどのお話をしたんです。安田先生のお宅で、緋の着物を着た書生さんに危なく門前払いになるところであつたけれども、幸い先生にお目にかかったときに、「一枚の葉っぱが手に入ったら、森羅万象、みんな手に入る。あんたはまだ二十八だから、これからやろうと思えばやれる。十年かかるか、二十年かかるか、一生かかるか、一生かかってもできないか、それはわからない。あんたの決心次第だ」と言われましたことをね、三分間でお話ししたんです。

今回、玄関で陛下にお目にかかり「おめでとうございます」と申しましたら、陛下がクスクスとお笑いになったんです。そして私のお話をする番が来ましたときに陛下のほうからね、「一枚の葉っぱは、もう手に入りましたか」と尋ねられました（笑）。

安田先生のお話を陛下は覚えていらつしたんですね。私は「どういたしましたも、なかなか手に入りません」とお答えしました。そして「日本画を描く上で一番苦しいことは何ですか」とおっしゃるから「それは陛下、何だとは申し上げられませんが、絵の具のことについても、形の上についても、余白のことにつきましても、もう万事が苦しゅうございます。ですから速く絵を描きたいと思っても、なかなか速く絵を描くことができません」

と申し上げて、三分が経たないうちに座らせていただきました。

三年前のことまで陛下はお覚えになつていらつしたんです。日本の国は、昔から皇室の血統のなかに天才がたくさんいらつしていますね。政治上の策略の上から、天才がいるとみんなお寺に入れてしまったわけです。名僧が陛下のお血筋に多いというのはそのわけです。

上へ置いておくと、心の汚い家来が自由に自分の権力を振るえないものだから、大津皇子（お

おつのみこ）のような気の毒な目にお遭いになったり、聖徳太子のような方もございます。まあ、これは余談でございますが……。

ところで、このお話の中の「一枚の葉っぱを手に入れる」ということと、小林（法蓮）先生がお教えになられた、反省によって自分の欠点を見つけ出し、その欠点を直していく苦勞とちつとも違います。私はちつとも違わなかった。そして、報恩会へ来ることと、安田先生のところへ行くことに、ちつとも矛盾を感じなかった。

小林先生は、自分の体験を話すこと、そのなかにね、飾りが入っちゃいけないとおっしゃっていました。

道場で質疑をされている方のお声を聴いておりますと、嘘だか飾りだか、あるいは真実だかわかります。

「先生、いつもいいお教えをいただきましたありがとうございます。おかげさまで家族一同病気をいたしませんで、健やかに過ごさせていただいております……」

とね、言ってらっしゃるけれども、聴いてみるとあながちそうでもないですね。

そういうふうな嘘が混じっちゃいけない。真実ということ、それが一番の土台。自分の真実を汚さないこと。いいことにつけても、悪いことにつけても、真実は一つしかありません。それが一番大事ですね。

それからもう一つ。私たちは一所懸命に努力しようと思っても、できないことがあります。身体の健康ということもございますけれども、わがままに育てられた人はですね、我慢とすることができないんです。苦しい我慢はなおできません。それを懈怠心（けたいしん）と申します。心の弛（ゆる）み、懈怠心を先生は戒められております。これは深く戒められないといけないことですね。

それから自分を買いかぶっちゃいけない。自惚れちゃいけない。誰でも自分自身は良くありたい。だから空想のなかで自分を良くして、本当は良くないんだけれども、想像の世界だけで自分を良くしてしまうんです。

あるときね、全体で撮った写真ができてきたんですよ。したら法得先生が「こうしてみな」とおっしゃって、その写真を手にお取りになって、じいっと見ていました。そして「いま、誰の顔を見たかわかるか？」とおっしゃった。

『誰の顔をご覧になったんだろう？』と思っていたら、

「真っ先に俺の顔を見たよ。お前たち、違うか？　たくさんの人を写した写真が来たときに、自分の顔を真っ先に見りゃしないか？　そうだろ、自分ってそれだけ可愛いんだよ。」

自分が可愛いのだから、自分をいたわることはいいかもしれないけれど、買いかぶっちゃいけない。自分の悪いところを人から指摘されたときに、うんと怒る人がいる。たいていの人も七割以上は怒るよ。

顔を見てみると、言葉では『はい、はい』と言っているけれども、お腹の底では怒っているよ。その怒っている心をね、家へ帰って繰り返し反省していくうちに『ああ、なるほど、ここだった、ここだった』と分かったとき、すぐ『先生、ありがとうございます』と言えなかったら残念だと思うことがあるよ」

反省するってことはそういうことなんです。悪い点を言われてね、怒ってしまったんではもうお仕舞いなんです。そして相手を恨んで、嫌って……。

でも、この報恩会のお教えを実行することはなかなか難しいですね。私もそういうことの連続でとうとう八十六歳になっちゃったんです。

「一枚の葉っぱが手に入ったか」と陛下に尋ねられまして、何ともいう言葉がございませんでした。半分でもいいから「入りました」と言えたらどんなにうれしかったかと思えますけれども、いろいろなことが分かってきて、少なくとも頭の前では、人様の体験を聴きながら分かっていただいで、初めの頃とは少し違いますね。違ってきました。

いまいただいた花束の薔薇も、この私も、皆様も、人も獣も毛虫もね、みんなこれは同じ友だちなんです。みんな何か不可抗力のある大きな力で作られた仲間なんです。お互いに仲間なんです。

神様が仏様か知りませんが、それをお作りくださいました靈妙不可思議なる宇宙の力。それを少しずつ少しずつね、『あ、これがそうだ』『あ、そうだ、そうだ』と四、五年にいったんずつぐらいに気づかせていただいています。

私も怒りっぽい人間だったんですよ。父によく似ておりまして、父はもう口が下手だから口で怒るのはじれったいんです。すぐ手が出るんです。

尋常小学校三年生のときだったかな、算術の問題が難しかったから、お父さんに聞いておりました。二遍説明してくれたんですけども、まだ私が「わかった！」と言わなかったんです。「こんな易しいことが分からんか！」と言って、そばにあったキセルで私をぶったんです。キ

セルが三つに折れてポーンと飛びましたことを覚えています。

母が「あなた、そんな乱暴なことを……」と言ったけど、父は「黙ってる！」と言いました。

お父さんの熱心さを感じますでしょ。それからヒュツと気がついてその問題が解けたから、

「お父さん、分かりました」と言ったんですよ。言ったとたんに、私、はらはらっと涙がこぼれた。

「分かったか。分かったならいい。分からなきゃほつとかないで、とことんまで考えるんだぞ」

私の父もそういう人でございました。

私の先生になってくださいました先生方は、もう言い合わたすように、そういう強烈な愛情をもった方々でございました。今日、私がこんな名誉を頂戴いたしましたということは、これは私のそばにあつてですね、手を取り足を取り、お導きくださった先生方のおかげさまと、それから母のおかげなんです。

私は母にどうやって親孝行したらいいのか、本当に分からないんです。この間、「母の日」というのがありましたね。「母の日」には皆さん、お母さんに赤いカーネーションを贈りましたでしょ。私は贈りませんでした。

母の肖像のかかっている前で「おばあちゃん、ごめんなさいね。おばあちゃん、最期までどんなに淋しかっただろうね」と言いながら、どうすることもできませんでした。

私が小倉に嫁ぐ前に、母は法蓮先生から六つの病気を午前中に治していただいたんです。「二年しかもたない」と言われていた母が、午前中に健康になったんです。

それで、お昼ご飯をてんこ盛りに食べてですね、食堂から送られてくるおかずも、いまままで食べてはいけなかった脂っこいものの照り焼きやら、固くて食べられなかったものも、みんなきれいに食べてしまつてね、それっきり治りまして、八十二まで生きたんです。

しかし母は、身体はそうやって先生からかばっていただきましたけれども、心の底にある、父への不満がどうしても取れなかった。

毎月法得先生が私の家へ講演にお越しくださいまして、終わると私の家で粗末なお食事を食べてくださったんです。父が満州から帰りまして、初めての月でございました。

「今日は父も母もそろっておりますので、先生、ごゆっくりしてくださいませ」と言つて、お酒も出しまして、先生もお酒をたくさん召し上がってくださいました。

そしたら先生が「誰か、手拭いを持ってきてくれないか」とおっしゃったんです。

「おばあちゃん、その手拭いをかぶって、ひとつそこで踊りな。三味線はないけどな。おばあちゃん、何踊る？」

「江（ごう）州音頭を踊ります」

すると先生は父のほうへ向かってこう言いました。

「お父さん、江州音頭は謡（うた）えるか？」

「はい」

「じゃ、お前さん、江州音頭を謡いなさい」

そして父が江州音頭を謡って母が踊りました。そのとき私は泣けてしよがなかつた。

翌日、先生がお帰りになるので大船駅までお送りしましたところ、手招きをなさいますのでまいりますと、

「昨夜は楽しかったね、ごちそうさま。だけどね、おばあちゃんはまだここに固まりがあるよ」と自分のお腹をさすりました。

「あの固まりを取るのはお前の役目だよ、いいか」と言われました。

その後、父は九十六歳まで生きて、母は父より早く八十二歳で亡くなりました。

そのときに母はどういう夢を見て亡くなったかと申しますと、みんなで熱海のお山に登っていく夢なんです。母は杖について、私たちが周りを取り囲んで、一所懸命にお題目を唱えています。おばあちゃんも一緒に唱えているんです。「南無妙法蓮華経……」とね。

そしてだんだん声が小さくなるんです。そして「ああ、しんど」と言いました。

「おばあちゃん、もう入り口はすぐそこに見えてきた。もうすぐそこだからね。さあ、手を取って行きますよ。みんなで行きましょう、力を合わせて……」

「南無妙法蓮華経……」と唱える母の声が本当の糸のようになったと思ったら、ばたっとお仕舞いでした。おそらく夢のなかでは熱海のお山の入り口に入ったところで、母は亡くなったんだと思います。

それから父の考えが変わりました。

父は母が亡くなるまで、ある宗教に凝っておりましたんですけれども、その後、報恩会に入らせていただいたんです。それについてはいろいろな話がございますけれども、今日は省きますがね……。

しばらくして父が九十六歳で亡くなりました。私はちょうど取材で江州（滋賀県）のほうを

くださいました。

おかげさまで父の夢も母の夢もあんまり見ません。あんまり夢を見るといけないそうですね。何にもいつぺんも見ない。父と母は、もう娑婆のことに心が残っていないんです。もう本当に天とひとつになっっているんじゃないでしょうか。

私はそれを見ましたからね、私たちは生きている間にそうなりたいと思うんです。

ここにお集まりくださいました方は「報恩会の教えというのはいったいどういう教えですか？」って何も知らない方から聞かれたときに何とお答えになりますか、一言で……。

ある方は詰まってしまうって答えができなかったそうです。ある方はいい加減なことを言つて、「これは私の勝手な考えですから間違っているかもしれないませんが……」とおっしゃったそうです。間違わないで一言でパツと言いたいですねえ。

私はまだその修行中ですからね、その境地までは行かれませんが、ただこれだけは言えます。

この世の中に一緒に生きているものはみんな兄弟です。みんな兄弟ですからお互いに愛し合つて、相手を先に自分を後にし、相手のために全力を尽くすことなんです。

夫婦ならば奥さんが夫に、夫が妻に……。犬や猫を飼っている人は、それもやっぱり人間と同じように……。お互い人間ならば、しっかり手をつなぎ合つて……。そして天のお造りくださいました「天の意志」と申しましょうか、それとひとつになりきれるように……。

このように教えてくださるところですが、こう言っただんじゃ分からない。

ですから、報恩会ではまず「夫婦道」からお説きになります。夫婦というものは誰しも一度は経験する通り道でございますから、一軒の家に妻として、夫として、子としているならばですね、お互いに自分のすべきことを正しく実行すること。その方法をね、先生はお説きになりました。

皆さんの体験を、いくつもいくつもみんなと一緒に聴きになりまして、その体験について批評をしながら、先生はお説きになっていきます。ですから宙に浮いた教えではなくって、あくまでも地べたにしっかり足の着いた教えでございます。一朝一夕にはできませんけれども、私は死ぬまで、この教えを実行させていただきたいと思っております。

比叡山のね、葉上僧正という方、皆様もよくご存じでしょう。天台宗総本山の比叡山の長老、葉上先生です。夏休みに、その葉上先生の仏教講話があったんです。そのときにね、報恩

会のお話をしてくれて申し込んできたんですよ。

いまなら私、おそろおそろでも参りますけどね、まだそのときは、いまから三十年も前のことですからどうお話しいいか分からないし、間違ったら大変だし、と思って「あのう、葉上先生、誰からそんなことをお聞きになりましたか」とお尋ねしたのです。

円覚寺の和尚さんから聞いたとおっしゃいましたから、円覚寺さんに飛んでいってね、「とんでもないことをおっしゃってくださいましたね。私、お断りに行ってきてもよろしいですか」って言いましたら、「うん、断りたければ行って断っておいで」っておっしゃったんです。だから比叡山へお断りに行きましたよ。そうしたら、断るところか私の言葉をまったく聞いてくれないんですよ（笑）。

「仕方なしにお話し差し上げました。もう仕方がない。

法蓮先生も「体験を語れ」とおっしゃってましたからねえ、あの母の体験を語らせていただきます。

母の体験といいますと、お風呂へ入ってね、自分のお道具（臆）のなかへ指を突っ込んで、自分の子宮はどのへんの高さまで下りているか見ようという、そういうきわどい話なんです。ただどね、これは卑猥な話ではなくて真剣な話ですよ。母はそれによって生き返ったんですからねえ。

私、その体験しか知りませんから、一所懸命それを話しましたの。そしたらね、一時間の予定が二時間になったけれど、皆さんお立ちにならないで、それはそれは一所懸命に聴かれました。

それ以来、葉上先生から毎年毎年、月にいっぺん必ずお葉書をいただくんです。それでこの間、私、葉上先生のところへご挨拶に寄らせていただきました。

「私、滋賀県の天津市で名誉市民にしてください、その式に出させていただきますところです。先生どうぞお体を大切にしてくださいませ」

と言って、お礼に行っていましたけれどもね、帰りに私どもの姿が見えなくなるまで先生は手を振ってくださるんです。

私、こういう偉い先生に声をかけていただくというのはね、あなたがち文化勲章のせいだけじゃないと思うんです。文化勲章なんかはね、もらったってもらわなかったって小倉遊亀さんに変わりはないでしょう。

そうでしょう、今年もらわなくたって去年の小倉さんと今年の小倉さんと同じことでしょう。だけでも報恩会の教えは一日一日違つてきますよ。一日一日違わなきやだめですよ。

ね、皆さんどうぞね、このお話をお聴きくださいましたらね、私、今日は自分にも言い聞かすのでございますけれども、一切の生物は刻々と変わつていく、これが自然なんです。刻々と変わつていかないものは、皆さんの心のなかにある煩惱だけ。その煩惱の虜（とりこ）になつちやだめです。ね、それを一日一日と取つていかなきやだめですよ。それも「先生に聞いた、先生に聞いた、先生に聞いた……」つて自分に言つて聞かせながら実行してくださいませ。

それから、この報恩会の教えの根底にあるものはあくまでも信仰心です。信仰ではなくつても、信仰心です。信仰心ということは恐れるべきものを恐れる心です。自分より優れたものに遵（したが）つていく心です。それがなかつたら人間、進歩つてものはございません。

私たちの進歩は健康だけでもありませんし、頭脳だけでもありません。あくまでも心です。それが全部です。心がその自然に天と等しくなつていく。その方法を探つていって、その道を通らせていただいている以上はですね、健康は後ろからついてくる。実際の幸不幸はその後ろからついてくる。私はそう信じておるんです。それが私の信仰なんです。

とりとめもないお話をいたしましたしまして申し訳ございません。いただいたお時間がまいりました。ありがとうございますました。